

# 第19回高島賞

## 受賞記念講演 ■川瀬 慈

国立民族学博物館の川瀬慈です。この度は、日本ナイル・エチオピア学会第19回高島賞を授与していただき、誠にありがとうございます。エチオピアにおける民族誌映像の制作ならびに、その上映活動を今回の受賞の対象としていただきました。我が国においては、映像作品を通じた研究は、本学会内のみならず、人文学全体のなかではマイナーな位置づけにあり、あまり注目されてこなかった分野といえます。そのようななか、私の民族誌映像の研究実践に着目いただき、このような賞をいただけることをたいへんうれしく感じると同時に、改めて襟を正す思いです。ここでは、手短ではございますが、自らの研究を振り返ると同時に、お世話になりました皆様に感謝の言葉をお伝えさせていただきます。



私は京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に入学し、重田眞義先生のお導きで、2001年にエチオピア研究をスタートいたしました。以来エチオピアのゴンダールとアジスアベバにおいて、主に音楽職能集団、路上で物売りを行う子供たち、憑依儀礼等を対象にした人類学的調査と民族誌映画制作を行ってきました。私の最初のエチオピア渡航は、米国において同時多発テロがおきた数日後でした。当時ミュージシャンであった私は、世界が揺れ動く情勢のなかで、のんきにアコースティックギターを抱えてエチオピアにわたり、音楽家たちと路上で音楽を通じた交流でもしようという、いわば軽い気持ちで最初のフィールドワークをはじめたのを覚えております。

エチオピア北部では、代々音楽を受け継ぎアムハラ社会のなかで音楽を担ってきた集団が存在します。楽器を用いず声だけで“門付”のパフォーマンスを行う吟遊詩人ラリベロッチ、そして弦楽器マシニコを奏で祝祭儀礼や酒場で歌い踊るアズマリです。私はこれらの集団とともに行動し暮らすなかで、いままで自分が考えていた音楽、すなわち、自由な表現、自由な精神の発露としての音楽とは違う音楽のありかたに気付かされました。ゴンダールでは、音楽家は鍛冶屋や皮なめし、機織りの職能集団と同等の“手に職能をもつ人々”、アムハラ語でいう“モヤテンニャ”という範疇に入り、社会的には被差別的な境遇にあります。音楽職能者を、アーティストとしてのミュージシャンと同じ地平で論じることはできないということに調査の最初に気付かされました。これらの集団との出会いから、「音楽」を相対化することの必要性について考えさせられたのが、私の研究の出発点であると存じます。

私の研究対象のアズマリやラリベロッチは、パフォーマンスが行われる社会背景や、聴衆の容

姿、職業などにあわせた詩を即興で創作したり、聴衆から投げかけられる歌詞の復唱を頻繁に行います。その歌詞は即興性や創造性、聴き手たちとの豊かなやりとりに支えられています。これは、私がかつとも惹かれてきた点といえます。当初、これらの集団のパフォーマンスの詳細を分析するツールとして、私は映像記録をはじめました。撮影したフッターを日本やエチオピアで多くの人たちにみせる中で、聴衆と唄い手の相互行為、その創造性、即興性の描写をテーマに映像作品としてまとめようという意欲がわいてきました。当時は、人々のインタラクションの詳細に着目した、いわゆる「客観的」なパフォーマンスの映像記録が可能であると、私は牧歌的に考えておりました。しかし、いざ撮影を行うと、被写体の音楽家たちは、撮影者である私の存在をジョーク交じりの歌にしたり、饒舌に私に話しかけたり、私自身の存在を映像記録から消し去ることがほとんどできないことに気付かされます。

民族誌映画は、映画の科学的利用のために、撮影時に被写体に極力干渉しない方法、あるいは、被写体への干渉を極力隠す方法論が奨励されてきたといえます。かつては、三脚の上に固定したカメラでとらえた長時間にわたる未編集映像こそが、撮影者の先入観や偏見が排除された、人々の本来の行動様式を抽出できるという考えが主流をしいた時代もあります。しかしながらそもそも、撮影者やカメラの存在が対象の人々の行動様式や態度に映し出されるのはむしろ自然なことであるといえます。このようななか私は、映像記録の中において、どうしても消し去ることのできない主体としての私の存在を逆手にとって、私自身が、被写体の人々と現地のことばで会話や議論を行い、そのやりとりを作品の主な構成要素にするという方法論を模索するようになりました。これは、制作者の存在や行動を文化事象の一部として組み込み、分析の対象とすることであり、調査者／撮影者の位置・主観をより意識的に前景化する過程であったといえます。この手法を探求したいいくつかの拙作は、民族誌映画祭のコンペティションを中軸とする国際的な映像人類学の論壇でとりあげられ評価いただき、ある一定の成果はあげられたと思います。

しかしながら、2007年あたりを境に、学術映画界での評価とは裏腹に、私の作品は、学会とは異なる脈絡で、エチオピア文化の表象のありかたをめぐる論争にまきこまれていきます。たとえば北米のエチオピアン・ディアスポラによる映像を通じたエチオピアン・アイデンティティの構築運動、あるいはユネスコの無形文化保護政策のポリティックスの脈絡です。それらの上映の脈絡では、私が映画に収めてきた、被差別的なイメージの範疇で認識される職能集団や路上生活者、あるいはエチオピア正教会からは邪教あつかいされる憑依儀礼等を「エチオピア国外の人々には見せるべきではない祖国の恥ずべき文化」としてみなし映像作品の中でとりあげることに深い懸念を示す視聴者がいます。この種の反応は、特にエチオピア政府の役人、国際機関職員やエチオピア国外に在住するエチオピア系の知識人等、エリート層にしばしばみうけられます。それらの人々は同時に、特に「エチオピア文化の〇〇〇を映像でとらえるべきである」という、強い主張、理想を掲げるため、作品の上映後、私としばしば撮影の対象の選択をめぐる衝突することがありました。強い批判や主張は、私にとっては決して気分の良いものではありません。しかしながら同時に、上映会の中では、論文を公表することによっては得られない意見や感情的なリアクションを得たり、対象を理解す

る新たな視点に気付かされることが多いことも事実です。私は、たとえ視聴者と意見や理想がことなっても、説明を通じて、自らの研究・調査目的を明示し、理解してもらえるよう努力するのが最良であると考えます。また、研究成果への「現地の人々」のフィードバックがどのようなものであれ、それを自分の著作の中で示し、そこでなされた研究者との間の交渉を記述することが重要であると考えようになりました。「現地の人々」はこの場合、必ずしも、調査・撮影された本人のみに限られるべきではないでしょう。直接的な被写体、調査対象ではなくとも、祖国の文化の表象に対して強い理想、主張を持つような視聴者とも交渉し記録する方法を模索していくべきであると考えております。

私の制作・上映活動はもちろん自分一人の力で成し遂げたものではありません。ゴンドール、アジスアベバの研究協力者をはじめ、被写体・被調査者とその親族、アジスアベバ大学エチオピア研究所の先生方など、たくさんのエチオピアの人たちに支えられてきました。サポートいただいたエチオピア現地の皆様への感謝を忘れずに研究をつづけたいとおもいます。また、この場にいらっしやる日本ナイルエ・チオピア学会の諸先輩の皆様にお礼を申し上げねばなりません。みなさまには論文のご指導、助成金の申請書の修正、フィールドワーク中のご助言、大学講義での拙作の使用・紹介等、いろんな局面でお世話になってきました。本来ならお一人おひとりのお名前を挙げさせていただき、謝辞を述べさせていただくべきですが、時間の都合でそれができませんこと、どうかお許しください。私の受賞の対象となった研究活動は、2005年から研究協力者、そして研究分担者として3期にわたり参加させていただいた「アフリカ音文化」に関わる科研調査プロジェクトの補助金の受領に支えられてきました。厳しくご指導下さったプロジェクト代表の神奈川大学日本常民文化研究所・川田順造先生にお礼を申し上げます。また私が人類学とアフリカ研究に出会うきっかけを作って下さった立命館大学文学部の恩師である渡辺公三先生にもお礼申し上げます。そして、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の恩師であり、私をエチオピアに導いて下さった重田眞義先生に、心から深く感謝いたします。重田先生は、私の大学院入学当初から博士論文執筆に至るまで一貫してご指導下さりました。さらに、民族誌映画制作の可能性を深く理解して下さい、困難な時も激励、ご助言下さいました。重田先生をはじめ、先生のもとで学ばれた諸先輩、仲間たちから直接ご教示いただけたことは私の財産であると感じております。

私にとっての民族誌映像制作は、文化の記録という人類学の命題と、映像の表現の次元の探求という決して容易に相いれることのない力の働きの動的な均衡をさぐっていく行為にほかなりません。今後のさらなる活動をとおして、この分野を開拓し、我が国における映像人類学のすそ野を広げていきたいと考えております。高島賞は、何かしらの到達を示すというよりも、これから発展していくことを奨励していただいている賞であると存じます。今後も皆様のご指導ご鞭撻を賜りたく、お願い申し上げます。本日は誠にありがとうございました。

(かわせ・いつし／国立民族学博物館)

〔付記〕 講演は、2013年4月21日、石巻専修大学で行われました。(編集部)